九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

蝶菴居士張岱

松枝，茂夫

https://doi.org/10.15017/2556587

出版情報：文學研究. 28, pp.33-42, 1941-03-20. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

蝶菴居士張岱

松枝茂夫

「蜀人張岱」と彼は好んで自ら名乘つてゐた。いかにもその人らしい感じである。宗子自ら作つた『自爲墓誌銘』はこの四字を以てはじまり、紹興なんておくびにも出してゐない。『西湖夢尋』にも「古劍の蝶菴老人張岱」と署してゐる。(四庫提要に「家はもと劍州、錢塘に僑寓す」とあるに據つたらしい商務印書館の『中國人名大辭典』はつひに「劍州の人、錢塘に僑寓す」としてゐる。地下の宗老、さぞかし滿足してゐることだらう)しかし事實彼の一家が蜀の竹篁から紹興に移り住むやうになつたのは、徐文長の『張太僕墓志銘』(徐文長逸稿卷二十二)に據れば、宋の咸淳中の事であつて、宗子の生れる凡そ三百二三十年の昔、十四五代も前の先祖の時である。彼の史學の友であつた李研齋は、蝶菴の大著『石匱書』を見て、居士の決して浙の産にあらざることを主張し、果してその先が蜀人であつたと知るや、どうだ〳〵と大笑し、自ら人を知るの明を誇つたといふ話がある。また祁豸佳は岱の『瑯嬛文集』に序して「嵯峨沖渫の奇を以て、萬壑千巖の秀を席き、其れ始めて脫胎結撰し、自ら合に磊砢韻秀、亮拔不羣なるべし、此れ其の生質然らしむ、豈に之と鋒を爭ひ勝を角ぶべけんや」といひ、宗子の先天的な賦質をやはり蜀の自然に歸せしめてゐる。話をそこまで持つて行くのは果してどんなものであらうか。某々は何省何縣の人と聞いただけで、

支那の事情にあまり通じてゐない吾々にさへ、成程こうなづかれる所があり、その人の性格や學問藝術が（甚だしきはその運命までも）或程度まで何かしらんわかつたやうな氣がするのもたしかに事實である。清明靈秀の山川が英雄と美人を生むといふのには一面の眞理が含まれてゐるのかも知れぬ。地の靈とか家の靈とかは存外大きな力を持つてゐて、單なる氣のせゐばかりではないかも知れぬ。さういふ風に考へると、張岱一家の人々は紹興人型と蜀人型と二つのタイプに大別出來るやうにも思へて來る。さしづめ『五異人傳』中の人々を蜀人型とすれば、張岱の高祖張天復、曾祖張元汴、祖張汝霖、父張耀芳等は紹興人型を代表すると云へはしないか。そして、いさゝか大袈裟な云ひ方でチト氣がひけるが、わが蝶菴居士こそはこの二つのタイプの融合的存在ではあるまいか、あたかも彼が明末公安竟陵二派文學の集大成者であるといふ云ひ方に倣つて云ふならば。彼には「磊砢韻秀、亮拔不羣」な蜀人氣質と共に、あくまで寒苦に耐えて生き拔き、たえずコツ〳〵勉强する恐ろしくねばり强い紹興人的性格（紹興は古への會稽の地、臥薪嘗膽の本場ではないか）もたしかにあつた。これは彼の藝術を理解する上に或種の手がゝりにはなるかと思はれる。だがその實かういふ云ひ方はごく便宜的なもので、たとへば宗子の先輩たる徐文長や王謔菴は純然たる紹興人なるに拘らず宗子以上に蜀人的であつたとも云へると思ふし、陶菴の文學がその生れる三百幾十年も前から斯くなるべく運命づけられてゐたといふのもをかしなものではあるまいか。それよりも私は、この老人が蜀人たることを得意になつて振廻してゐるその事を如何にも蝶菴居士らしいと思ふ。その心意氣が目に見えるやうな氣がする。知堂先生が（曾て）自ら京兆人と稱したのと、意味はちがふが、比べ合はせて面白いと思ふのである。

張宗子は公安竟陵文學の融合者、集大成者と云はれてゐる。時代から云つても地位から云つてもその言葉は正しい。彼が幼い時分から最も尊敬してゐたのは徐文長であつた。青藤山人は云ふまでもなく有明一代の奇才、詩文書畫戲曲、往くとして佳ならざるはない傑物で、紹興には今日なほその逸話がたくさん殘つてゐるさうである。居士の文學はすべて文長から出發してゐると見て不可ない。彼は友人から、文長が君のことを「おれの後身」であると云つた夢をみたよと云はれて、まんざらでもないらしい氣持を『瑯嬛詩集序』に書いてゐる。

張家と文長との關係からして並々のものではなかつた。彼の高祖張天復及び曾祖張元汴は、文長を以て單なる同鄉の後輩として引立てただけでなしに、世に容れられぬこの不羈奔放な天才を心から愛してゐた。張宗子の校輯に成つた『徐文長逸稿』には、大雪の朝、元汴から羊肉と酒を贈られたに對する禮狀なども收められてゐる。文長がつまらぬことから妻の貞操を疑つてこれを毆殺して下獄するや、極力奔走して出獄せしめたのも元汴であつた。もつとも元汴の禮法に嚴重なこと――彼は王陽明再傳の弟子で忠孝一本の謹嚴な君子人であつた――には文長もやりきれないものがあつたと見えて、晩年京師に出て、元汴の館に厄介になつた時、ちよつとの事で喧嘩をして飛び出し紹興へ歸つたりしてゐる。しかし張岱の祖父張汝霖が『逸稿』の序に書いてゐるところに據れば、元汴の歿した時、それまで十年門戸を閉し絶粒してゐた文長が、突然白い喪服を纏うて張宅に入り、棺を撫して大哭し、「たゞ公のみ我を知れり」と云つて姓名を告げずに歸つてゐる。文長自身もその『自著畸譜』（逸稿附錄）の「紀恩」の項下に「嫡母苗」の次に「張氏父子（太僕・殿撰）」と紀してゐる。（太僕は天復、殿撰は元汴を指す。）

張汝霖はまた自分が子供の時分に文長から非常に可愛がられた思ひ出を、やはり『逸稿』の序文に書いてゐる。汝

霖がその父元汴の命で文長を獄中に見舞ふと、文長は自分の著ける械を囊に入れて壁に釣るしてゐた。汝霖さつそく「これは先生の無絃琴ですか」と戯れたら、うまいことを云ふ子だと文長から褒められた話。また文長がその著『闕篇』の自序に「怯里馬赤」（夷語で史の意）と書くべきを、うつかり誤つて「怯里赤馬」と書いたのを指摘して、文長を一本參らせた話。等々を記してゐる。祖父のペットであつた張岱は、幼い時からお祖父さんにさうした思ひ出ばなしを聞かされて、自分の生れる四年前に七十三で死んだ不幸な天才に對して、限りない思慕の念を懷いてゐたらうことは十分察せられる。彼はそこで若い時から文長の詩を學び、また心してその遺文を蒐め、お祖父さんと同年に試驗に通つた尊敬する先輩王謔菴の意見も叩いて、『逸稿』を編したのであつた。

ついで彼は袁中郎がすきになつた。それとて彼に云はすれば、「中郎が文長を喜んだから、文長を喜ぶ所の中郎の詩を幷せ學んだ」のであつた。徐文長と袁中郎との關係は中郎の『徐文長傳』によつて明らかである。中郎は京師に在り、一夜友人陶望齡（紹興の人）の家で文長の詩集を見つけ、ボロ〳〵でろくに字の形も見分けられぬやうになつたのを燈の下でよみ、數首ならずして覺えず驚躍し、急ぎ望齡を呼んでその詩を指し、これは誰だ、古人か今人か、とせきこんでたづねる。望齡が「これはわが鄉の徐文長の作である」と云ふ。二人は讀んでは叫び、叫んでは讀み、その騷ぎに眠つてゐた下男達までこう〳〵目を覺ましてしまつた。「不佞生れて三十年、始めて海内に文長先生あるを知りぬ、噫、是れ何ぞ相識るの晩きや」と中郎は嘆じてゐる。恐らく萬曆二十六年（西紀一五九八）の事で、時に文長既に死して五年、わが張岱は二歳である。この年、中郎（三十一歳）は官を解いて京師に至り、京兆校官たり、その兄伯修（三十九歳）は講官として東宮に仕へ、弟小修また太學に入つてをり、三袁悉く京師に在り、城西崇國寺蒲

桃林に社を結び學を論じ、往來する者に潘士藻、劉日升、黄輝、陶望齡、顧天峻、李騰芳、吳用先、蘇惟霖等あり、公安派文學の漸く華やかに咲き出でんとする時であつた。

三袁のうち小修を除く二人は早く歿し——伯修は陶菴四歳の時、中郎は陶菴十四歳の時、小修は陶菴二十八歳の時それ〴〵死んでゐる——居士の少年時代の詩壇はすでに公安派の清新流麗から竟陵派の奇僻なスタイルに移つてゐたと考へられる。彼の興味が鍾伯敬・譚友夏の方へ惹かれて行つたのも自然でなければならぬ。のみならず同鄉の先輩王謔菴（岱より二十二歳年長）、倪元璐（四歳上）、友人の劉同人等みな竟陵派の錚々たるものであつたのである。しかし彼は『瑯嬛詩集序』でこんな意味のことを云つてゐる。「自分はわかい時から文長がすきだつた。そこで文長の詩を學んだ。中郎が文長を喜んだので、文長を喜ぶ所の中郎の詩を幷せ學んだ。文長・中郎以前の詩は學ばなかつたのである。その後、鍾・譚の詩を喜び、また鍾・譚を學ばうと思つたが、つい暇がなくて、伯敬・友夏はすきだけれども未だ學ばなかつたのだ。……そこで始めて自ら悔い、それまでに作つた文長に似た詩を殘らず燒き、鍾・譚的でない字は一字も用ひぬやうにして刻苦十年、骨を滌ひ腸を刮る思ひをして鍾・譚を學んだものだ。ところが一向鍾・譚に似ない。結局これは生れつきのものである。少々樣子をかへてみたところでそれは表面だけのことで、その骨格は依然一文長であつたのだ。……自分は既に文長に似た詩は悉く燒いてしまつたのであつた。今又少しばかり鍾・譚に似てしかし結局文長に似てゐるところの詩を燒いてしまふとすれば、自分の詩で燒いてならぬものは無くなるわけである。そこで余は大いに悟り、自分が燒かうと思ひながらまだ燒かずにゐたのを殘らず集めてこれらの若干首を得たのである。」

彼の八弟張毅儒は最も熱心なる鍾・譚フアンであつたが、陶菴はこれに手紙を與へてかう云つてゐる。「どうか君も自ら手眼を出すやうにして欲しいものだ。鍾・譚を拂ひすて、王・李を推しのけ、毅儒・陶菴があくまで毅儒・陶菴たり得たならば、天下の能事は畢るのだ。」こゝに陶菴の本領が見られる。徐文長はもとより、三袁にしろ鍾譚にしろ、そのスタイルこそ著しくちがひ、むしろ對蹠的であるが、絶對に古人を模倣せず、專ら獨創を尙び、つまり「自ら手眼を出す」ことにつとめた點では軌を一にしてゐる。「徐文長の後身」を以て任じた陶菴は、三袁鍾譚を好んでこれを學び、又よくこれを乘てゝ、陶菴はあくまで陶菴たるに徹せんとした。彼が眞に徐文長の後身たるに羞ぢず、また公安竟陵文學の理想的な集大成者たり得た所以はこゝにあつた。

このへんで居士自身にその閲歷を語らせることにしよう。次にかゝげるのは彼が六十九歲のとき自ら作つた墓誌銘で、文は『瑯嬛文集』卷五に載つてゐる。たゞ彼の文章は何しろ難物である。周先生のいはゆる「故意に用ひた怪文句」が目白押しに詰まつてをり、到底私なんかの手に負へるしろものではない。大意なりとも取れゝばと思ふがそれさへ危いかもしれぬ。

「蜀人張岱、陶菴はその號である。少にして紈絝の子弟たり、極めて繁華を愛した。精舍を好み、美婢を好み、孌童を好み、鮮衣を好み、美食を好み、駿馬を好み、華燈を好み、煙火を好み、梨園を好み、鼓吹を好み、骨董を好み、花鳥を好み、かてゝ加へて茶淫であり、橘虐であり、書蠹であり、詩魔であり、つひにうか〳〵と半生を過し、すべては夢まぼろしとなつてしまつた。

「五十になつた年に、國は破れ家は亡びたので、世を逃れて山に入つた。手元に殘つたものとては、こわれた床、ぼろ〳〵の机、足の折れた鼎、ひゞの入つた琴、それに半端になつた書籍數帙と缺けた硯一個のみであつた。布衣蔬食して辛くも生き長らへつゝも、炊ぎの煙は常に杜絶えがちであつた。二十年前を回顧すれば、實際隔世の感がある。

「常に自分を批評して七つの不可解ありとしてゐた。さきには布衣の身で公侯を擬しながら、今では世家に生れた身で乞食同然のくらしをしてゐる。かくの如きは貴賤を紊るで、不可解の一である。產は中流階級の人にも及ばぬのに、むかし石崇といふ大富豪が張つた金谷の宴のやうな豪奢な宴も張りかねぬし、そのくせ世には隨分と出世の拔道も多いものを、獨り頑固に株を守つて山に引籠つてゐる。かくの如きは貧富舛ふで、不可解の二である。書生の身を以て戰場に乘り出し、將軍の身を以て文苑に關係してゐる。かくの如きは文武錯ふで、不可解の三である。上は玉皇大帝に陪しても諂はぬが、下は悲田院の乞食に陪しても驕ることがない。かくの如きは尊卑混ずで、不可解の四である。相手が弱いときには面に唾を吐きかけられても拭きもせずに許してやるが、相手が強いときには單騎で敵中に躍りこむ。かくの如きは寬猛背くで、不可解の五である。名利の爭奪には甘んじて人後に居るが、物見や遊び事の場合には斷じて人に先を讓りはせぬ。かくの如きは緩急誤るで、不可解の六である。博奕や碁將棋では勝負の見分けさへつけきれぬのに、茶を啜り水を嘗める段になるとよくその水の出所を言ひあてることが出來る。かくの如きは智愚雜はるで、不可解の七である。以上七つの不可解を有してゐる。自分でさへ解せぬのであるから、どうして人の解するを望まうか。故に自分を以て富貴の人と稱してもよければ、貧賤の人と稱してもよい。智慧者と稱してもよければ、愚鈍者と稱してもよい。剛直な人間だと稱してもよければ、柔弱な男と稱してもよい。性急な人間だと稱してもよい

し、ずぼらな人間と稱してもよい。書を學んで成らず、文章を學んで成らず、仙を學び佛を學び、農を學び圃を學び、いづれも成らなかつた。世人が自分を呼んで極道息子といはうと、廢物といはうと、頑民といはうと、鈍秀才といはうと、居眠り男といはうと、死にぞこなひの老ぼれお化けといはうと、仕方のないことである。

「初め字を宗子といひ、人が石公と呼んだから、そのまゝ石公を字とした。著書を好み、出來たものに『石匱書』『張氏家譜』『義烈傳』『瑯嬛文集』『明易』『大易用』『史闕』『四書遇』『陶菴夢憶』『說鈴』『昌谷解』『快園道古』『侯嬰十集』『西湖夢尋』『一卷冰雪文』があり、世に行はれてゐる。萬曆丁酉八月二十五日卯時に生れた。魯國相（山東兗州の魯獻王府の長吏）大滌翁（張耀芳）の嫡子である。母は陶宜人といつた。幼い時からよく癲癇を患つたので、母方の祖母に當る馬太夫人の許に引取られて十年ばかり養はれた。母方の曾祖に當る雲谷公が廣東廣西の役人をつとめてゐられた關係で、生の牛黃丸を籠に幾杯も藏せられてゐたが、余はこの世に生れ落ちてから十六歲になるまでに、殘らずそれを食べ盡して、やつとその病氣が治つたのであつた。

「六歲のとき、祖父雨若翁（張汝霖）が余を杭州に連れて行かれ、あたかも陳眉公先生が一角鹿に跨つて錢唐（杭州のこと）の遊客となつてゐられるのに遇つた。先生は祖父に向つて、お孫樣は對句を上手に作られるさうですナ、この場で一つわたしに試めさせて下さい、と云つて、屏立にかいてあつた李白が鯨に乘つてゐる繪を指して、

太白騎鯨、采石江邊撈夜月。

と云はれたので、余は早速に

眉公跨鹿、錢唐縣裏打秋風。

と附けた。（打秋風とは、旅廻りの藝術家などが土地の慈善家に旅費を無心することである。陳眉公は當時名聲赫々たる文士、いはゆる「山人」の雄であつた。六歳の子供にからやられては流石に一本參つたらう）眉公は大いに笑ひ、躍りあがつて、なんといふ悧口な子であらう。わしの小さき友だ、と云ふわけで、余に千秋の業（文學の道を指すのであらうか）を進めようとした。しかるに圖らざりき余はつひに一事も成る無くして今日このていたらくにならうとは。

「甲申（崇禎十七年三月十九日、李自成京師を陷れ、毅宗皇帝煤山に自ら縊つて崩じ、明こゝに亡ぶ。西暦一六四四、時に張岱四十八歳）以後は悠々忽々、死を求めることも出來ねば、生に安んずることも出來ず、白髮頭ぼう〳〵と老いさらばつた身を、なほこの世にさらして生き長らへてゐる。恐らくは一朝溘然として朝露よりも先に、草木と共に腐れ果てることであらう。ところで古人王無功、陶淵明、徐文長はいづれも自ら墓銘を作つてゐるから、自分も一つその顰みに效つてそれを作つてみようと考へた。がサテ書く段になつてみると、人間も文章も碌でもなく思はれて、筆を擱くこと一再に止らなかつた。とはいへ、自分のいろんな癖や錯りを言ふだけならば、傳へてもよからうと思ふのである。曾て生壙を項王里の鷄頭山に營んだ。友人李研齋がその壙にかう題してくれた。

嗚呼有明著述鴻儒陶菴張長公之壙

漢の高士梁鴻の塚が要離の近くにある。余はだからこそ項王里をえらんだのだ。來年は年七十に達する。いつ死にいつ葬られるか、その月日はまだわからぬから書かぬ。銘に曰く、

窮石崇、門金谷、盲卞和、獻荆玉、老廉頗、戰涿鹿、覆龍門、開史局、饞東坡、餓孤竹、五穀大夫、焉肯自鬻、
空學陶潛、枉希梅福、必也尋三外野人、方曉我之衷曲。」

この銘文は實はよく讀めない。大體の意味はまづこんなところでもあらうか。——貧乏なくせにあつぱれお大盡を

氣とり、晉朝の大金持石崇の向ふを張つて金谷の宴にも負けない豪奢な遊びをしたものだつた。卞和ほどの玉を見わける眼は持たぬくせに、兩足を斬られてもなほ敢て玉を獻ずるやうな事もした。廉頗の如き猛將軍でも老ぼれてしまつては物の役に立たぬのだが、自分はてつきりそれなのになほ涿鹿の野に進み天下分け目の戰に參加した。太史公の爪の垢ほどの史才も持たぬ身で、明史を書く氣にならうとはどこまで大それた俺だらう。むかしは蘇東坡もはだしの食道樂に浮身を窶した自分が、今では伯夷叔齊もどきに蕨を食つて餓ゑを凌がうとは。五羖大夫百里奚は決して己の身を五羖羊の皮と引替に賣つたのではなかつた筈だ。陶淵明を學び梅福（王莽のとき紹興にのがれた隱士）たらんと願つたものだが結局駄目だつた。しかしかの三外野人（宋の滅亡後吳下に隱れて世を絕つた鄭思肖のこと）を尋ねて、はじめて余の眞意を知ることが出來るであらう。

張岱の歿年は乾隆山陰縣志に年九十三とあるのを信ずべきであらう。時に康熙二十八年である。邵廷采の『明遺民所知傳』（思復堂集）に年七十餘とあるのは明かにまちがひである。『瑯嬛文集』中に八十一歳の作『蝶菴題像』を收めてゐるのだから。縣志は邵氏の傳を訂正したものなのだ。彼の生涯は甲申を境に截然と二分され、前期の紈絝の子弟としての濶達豪華な生活は『陶菴夢憶』等によつて一班を窺ふことが出來るが、國亡び家破れて會稽山中の人となつて以後の消息は全くわからない。自輓詩をつくり生壙を掘つて、自殺しようと欲しながら、なほ便々と生きながらへたのは、三十二の時に稿を起し爾來四十餘年間の心血を傾けた所の『石匱書』（明朝二百八十二年の歷史）を完成したいばつかりであつたのに、その原稿さへ人に賣らねばならなかつたとはよく〳〵の事であつたらう。また布衣の身で將軍となり涿鹿の野に臨んだといふのは甲申前後の事であらうか。『瑯嬛文集』中の片言隻句によつて想像を逞しくするのみで、しかとした手がゝりはまるで得られない。

（未完）